



「活力を貰うスタディーツアー」

アーシャ理事長・牧野一穂

私ども「アーシャ」は会員やインドの農村開発活動に関心のある方々を対象に、現地のアーシャの活動、農村の課題、社会問題、歴史、国際協力の理解を深めるスタディーツアーを企画、実施しています。参加者の関心に応え、現地の生活や観光も楽しみながら、プロジェクトのスタッフや研修生との交流を深めます。活動を行っている地域の課題を一緒に考えながら、解決への提言へ繋げることも期待されています。「百聞は一見にしかず」で現地の活動や状況を機関紙「アーシャ」で紹介しても、その理解度は現地を訪ねるのとでは大きな違いがあります。観光ツアーでは決して味わえない、楽しい有意義なツアーです。

今年3月4日から13日まで「アーシャ」と「インド三浦後援会」の共同主催でツアーが企画されました。参加者は17歳から73歳と年齢の変化に富み、参加者の都合にあわせて7日から11日間と異なる滞在期間中、私がツアーの引率者となり、実施されました。1名はツアー終了後、滞在期間を延期し自由旅行を楽しんでいました。今回はかなり参加者の要望に応えた柔軟な対応がされ、参加者に満足いただけた企画であったと思います。

毎回のアラハバード訪問がそうですが、私の現地訪問はプロジェクトの発展状況や問題を知る、考える、また、新しいアイデアを得る良い機会なのです。私の一番の関心事は、30年前「愛農会」の協力、支援で始まった有機農業の普及、定着状況です。2005年から始まった貧農、小農支援のプロジェクト活動、有機農法によるブロイラー養鶏、野菜栽培、水稻栽培による生活・収入向上支援が持続的になされ、定着してきているかです。

また、農民によるマイクロクレジット (SHG)、有機



仏跡を観光するスタディーツアーメンバーと牧野（後列左橋）。

農業組合 (AOAC) による味噌醤油ら農産加工品販売の進捗状況を知ることも楽しみです。こうした活動は、現地の責任者、三浦の責任と指導によって進められています。出来るだけ早い時期に、現地の人の指導下で独立した政府認可の組織、法人 (組合や会社) として独立した活動が続けられるよう、願います。

今回のツアーで「アーシャ35号」1ページに写真が掲載されていた二人の女性、昨年7月から10ヶ月農業研修コースに地元から参加しているサビトリとプージャに会うことが出来ました。サビトリは30年程前に始めたシムラ村の教会学校に通っていた子でした。プージャは、飲料水、生活用水に困っていた村々に500本の手押しポンプを設置した時、10年間に渡りポンプ設置を請負、助けてくれたラメッシュの娘でありました。小さい時に会った記憶はあるが、はっきり覚えていませんでした。長年培かわれ、信頼協力関係が育った芽を見て嬉しかった。

少年労働者のために始めた夜学の学生で、継続教育センターの門番をして学費を稼ぎ、高校を卒業したサントシュは、電気工事の技術を学び国家資格を取り、前回訪問の時にはデリーで電気工事請負業者の仕事をしていました。それが今は独立して仕事をしていました。ツアーに参加して現地の状況、50年前に播かれた種が育っている様子をこのように知ることは「アーシャ」の活動を支える私の大きな活力になっています。